Osaka University Knowledge Archive

Title	音声的特徴から見た日本語感動詞の機能
Author(s)	須藤, 潤
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/873
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【10】

氏　　名	須　藤　　潤（すどう　じゅん）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２２５２２　号
学位授与年月日	平成 20 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	**音声的特徴から見た日本語感動詞の機能**
論文審査委員	（主査） 教　授　郡　　史郎 （副査） 教　授　上田　　功　　教　授　田野村忠温　　教　授　角道　正佳 准教授　筒井　佐代

論　文　内　容　の　要　旨

日本語の感動詞は国語学・文法論からの位置づけがなされてきた一方で，応答表現，あいづち，談話標識，言いよどみ・フィラーといった談話研究からの位置づけも盛んに行われている．しかしながら，感動詞は音声コミュニケーションにおいて典型的に現れるにもかかわらず，音声的な位置づけはほとんど行われていない．アクセント型の記述やモーラ単位による区切りなど音韻的に解決しなければならない問題があるにもかかわらず，従来の研究の多くは，感動詞の音声的特徴には全く触れない，あるいは，部分的な記述のみに終始していた．よって，感動詞を音声の側面から記述し，音声的な枠組みを整備することは，日本語教育にとって有益であることのみならず，文法論や談話研究において感動詞の機能を考える上で，多くの示唆を与えるであろう．

そこで，本研究では次の2つを目標に据えた．1つは，日本語感動詞の音声について全体的な記述を行うこと，そしてもう1つは，感動詞の持つ機能を音声の側面から解明することである．

具体的な議論に入る前に，2章では感動詞の意味・機能に関する先行研究と，音声会話における音声と情報伝達に関する先行研究を概観し，本研究の方向性をより明確にした．感動詞の意味・機能に関する先行研究から指摘できることは，従来の多くの論考において，感動詞の音声的特徴を記述することの重要性を指摘しているにもかかわらず，音声の枠組みに沿った記述がなされていないことが多いということである．そのため，分析対象である感動詞の音の高さの変動を観察することに終始し，感動詞全体の音声的な枠組みを踏まえた議論になかなか進んでいかないのである．一方で，音声と情報伝達に関する先行研究からは，音声が言語的な情報のみならず，会話参加者や発話環境といった情報と関係があるということが示唆された．

このような問題点や示唆を踏まえ，具体的に本研究では，まず，内省や先行研究，データの観察などをもとに，様々な感動詞の音調（音の高さの変化）を日本語のアクセント・イントネーション体系に位置づけ，音調とそれを規定する要因の整理を行った．次に，個々の感動詞について調査協力者から得られた音声データの分析を行い，音声的特徴と要因との対応関係をさらにきめ細かく作り上げていった．そして，感動詞の言語的な意味・機能，会話参加者間の対人関係など，これまで指摘されてきた音声的特徴に多様性を持たせる要因を総合的に再検討し，最後に，音韻的な観点から日本語の語彙における感動詞の位置づけについてまとめた．これにより，従来の先行研究の問題点を解決できると考えた．

総論となる3章では，感動詞の音調をアクセント・イントネーションの枠組みで記述し，意味・機能など音調を規定する要因を整理した．

3章では，まず，感動詞の音調を記述するための枠組みとなる，アクセント・イントネーションについて検討した．特に感動詞は単独で文となりうることから，文末音調に準じた，その感動詞固有の音調としての「語末音調」を枠組みとして取り入れた．この枠組みにより，ほぼすべての感動詞の音調が記述可能となると考え，原則的にアクセント型と語末音調との組み合わせでの記述をめざした．

次に，音調を記述する上での分類基準として，モーラと音節に触れた．特に下降の音調以外にモーラを数える手がかりに乏しい1音節の感動詞は，持続時間を頼りにモーラを数えることが多い．そのため，そのようなモーラ単位による分類がどこまで意味あるものなのか判断しがたい．しかし，その一方で，音節単位の分類とすると，様々な音調や長さを一元的に扱え，かつ，音節構造が似ている感動詞同士で音声的特徴の比較もしやすくなるという利点がある．このことから，感動詞を1音節感動詞と2音節感動詞に分類し，音調を記述することとした．

記述の結果，1音節感動詞については，音調のタイプ別に分類すると，一種類のアクセント型で説明できる第一のタイプ，有核と無核という2つのアクセント型のみで説明できる第二のタイプ，そして，有核と無核の2つのアクセント型とそれに伴う語末音調によって説明できる第三のタイプが見られた．また，有核と無核の2つのアクセント型を持つ第二・第三のタイプには，入力情報の処理過程に関わる意味・機能があり，語末音調が伴わない場合は，有核と無核で意味・機能の使い分けが見られた．2音節感動詞については，上で触れた第一のタイプと第三のタイプに加え，1種類のアクセント型と語末音調で説明できる第四のタイプが見られた．第三・第四のタイプとも入力情報の処理過程に関わる意味・機能があった．

このように感動詞は，音調のタイプ別に4つに分類できることがわかった．また，このような音調のタイプは入力情報の処理過程の表示とも関係があり，一種類のアクセント型のみで音調が説明できる第一のタイプの感動詞は，基本的には入力情報の処理過程を表示しない「非処理」であったが，そのほかのタイプの感動詞は「入力情報の処理開始表示」「入力情報の処理結果表示」「入力情報の処理前表示」という入力情報の処理過程を表示するものであった．したがって，入力情報の処理過程を表示する感動詞は，話し手の様々な態度表示や認識の変化の表示に対応できるように，2つのアクセント型，あるいは，複数の語末音調，もしくは両方の組み合わせによる音調のバリエーションが必然的に

備わっていなければならない，という結論に至った．

次の4章では，個々の感動詞についての議論として，音声的特徴と意味・機能のバリエーションが豊富な「うん系」感動詞の音声的特徴と意味・機能に焦点を当てた．具体的にはまず，先行研究やテレビドラマの会話資料の採集データ（82例の「うん」）に即した，「うん系」感動詞の意味・機能の分類と音声的特徴の観察を行った．その結果，採集データの「うん」についても，3章の入力情報の処理過程に沿った「入力情報の処理結果表示系」「入力情報の処理開始表示系」「入力情報の処理前表示系」「非処理系」という4種類に分類が可能であった．また，採集データのうち90%以上の「うん」が「入力情報の処理結果表示系」に分類されていた．さらに，採集データを見ると，4種類の分類の中にも様々な意味・機能のタイプがあり，その微妙な違いも音声的特徴を左右するという可能性も指摘できた．

次に，そのような微妙な意味・機能の違いと音声的特徴との関係について，「入力情報の処理結果表示系」の意味・機能のうち，情報の入力に対する肯定的な結果表示の「受け入れ」に焦点を当てた．具体的には，まず，実験用に作成した会話の中の相手の意見に対し，同意の場合と非同意の場合を「うん」を含む発話で調査協力者に会話文を読み上げてもらう実験を行った．そして，実験によって得られた発話データについて音響分析を行い，同意・非同意という受け入れの度合いの違いが「うん」の韻律的特徴にどのような変化をもたらすかを観察した．その結果，同意・非同意の「うん」には持続時間とF0の下降の傾きについて有意な差が見られた．そして，この要因として「非同意の際の相手への配慮」と「肯定的な要素の強さ」を指摘した．

さらに4章では，否定的な結果表示の「うん（ううん）」と「いや」についても，会話文の読み上げ実験により得られた発話データの音響分析によるF0曲線の観察を行い，アクセント・イントネーションの枠組みに位置づけた説明を試みた．その結果，語末音調に共通して，問いかけとは異なる特有の疑問型上昇調が現れたものの，アクセントの枠組みで考えると，互いに異なるアクセント型となり，意味・機能が共通するからといって，音調が共通するとは必ずしも言えなかった．

それから，5章では，応答発話に現れる「あ」の音声的特徴と会話参加者間の対人関係に焦点を当てた．先行して行った会話文読み上げ実験における発話データの分析結果をもとに，様々な持続時間・F0曲線に合成した「あ，持って来てました」を刺激音とした聴取実験を行った．その刺激音を応答発話として発する話し手と相手との対人関係について，親疎（「親しい」と「初対面」）と「上下」（「相手が上」「相手と同等」）という二つの軸で回答を求めた．その結果，①持続時間が150ms以下，高めのF0，そして「持って来てました」の高めの「て」が「相手が上」「初対面」と判断される傾向，②F0下降型が「親しい」と判断される傾向，③持続時間が250ms以上の「あ」が「相手と同等」と判断される傾向が見られ，これらについては，発話の際の，話し手の生理的側面と意図的側面（話し手の緊張，相手のフェイスに対する配慮の手段としての「私的な」情報の表示）により説明が可能であった．しかし，F0が320Hz平板・持続時間が250ms以上の「あ」が「親しい」と判断された傾向については，発話機能などといったほかの側面から考えるべきものと判断された．

そして，6章では，3章から5章までの議論をまとめ，それをもとに，音声的な側面から「感動詞の機能」に関する知見を指摘した．第一に，感動詞の音調はアクセント・イントネーションの枠組みで記述可能であるが，語によって同一語に有核・無核の2つのアクセント型，そして，様々な種類の語末音調（語に帰属する文末音調に準じた音調）が見られた．第二に，音調の側面から感動詞を類型化すると，アクセント型が一つで，語末音調として平調以外が伴うことがないタイプと，アクセント型が有核・無核の二つで，様々な語末音調が伴うタイプとに大きく分けられた．そして，前者のタイプは「非処理」の感動詞，後者は情報処理過程の表示にかかわる感動詞，と話し手の情報の処理過程の表示を担うかどうかと対応関係を持っていることがわかった．そして，第三に，感動詞の音声的特徴を規定する要因として，語彙的な要因，意図的な要因，生理的な要因があることを指摘した．

最後に，7章では，以上の議論を総括し，今後の課題として，音調と要因間の見取り図の精度をより上げるため，入力情報の処理過程による感動詞の機能が説明可能かどうか検証すること，個々の感動詞について自然発話データや実験的手法により得られた発話データの分析による検証を行うことなどを指摘した．そして，そのための出発点として「うん系」感動詞の分析範囲を広げ，他の感動詞を検討する際の基礎となる見取り図を作るべきであると述べた．

論文審査の結果の要旨

論文の概要

日本語の感動詞は，音の高さの動きや長短などに応じてさまざまな意味・機能を持ちうる。本論文は，そうした音声的特徴と意味・機能の対応関係を多くの感動詞について記述し整理した研究である。本論文はさらにその結果にもとづいて，感動詞の音声を日本語の音声組織の中でどうとらえるべきかを検討し，また日本語の語彙の中で感動詞をどのように位置づけることができるかを論じている。すなわち，感動詞を手がかりに日本語音声の特徴の一側面を明らかにし，同時に音声的特徴を手がかりに語彙としての感動詞の性質を考察した研究になっている。

論文の特色と評価

感動詞の研究として

感動詞には多種多様なものが含まれる。本論文の第１章と第２章において多くの先行研究の検討を通じて詳述されているとおり，応答表現，情動表現，あいづち，談話標識，言い淀み・フィラーなどに分類される個々の感動詞が有する意味・機能については，近年の談話研究における研究の対象となっている。また，それらをひとつの共通の働きを持つ語彙要素群ととらえた上で，話者の心的処理状態から意味・機能を説明する研究も行われている。そうした先行研究の中で，感動詞が音の高さの動きや長短などに応じて異なる意味・機能を持ちうることが指摘され，限定的な考察もなされてはいた。しかし，感動詞は音声言語に不可欠な要素であるにもかかわらず，音声面を考慮した本格的な研究はこれまで存在しなかった。

本論文は，音声的特徴と意味・機能の対応関係を多くの感動詞について本格的に記述し整理した初めての研究であり，そのことによりこれまでの感動詞研究の大きな穴を埋め，重要な新知見を提供することに成功している。

そうした新知見のひとつが，音声的特徴から見た場合の類型として，感動詞は一般的な語と同等の性質を持つ「さ」「や」「よ」「おい」「ほら」「こら」等のグループと，語でありながら文の性質もあわせ持つ「うん」「あ」「え」「お」「はい」「あら」「いいえ」等のグループに分けられるということである（第７章）。

感動詞音声の研究として

感動詞において意味・機能との対応関係が特に問題になる音声的特徴は，高さの動きや長短などの韻律的特徴である。先行研究として特定の感動詞について韻律的特徴と意味・機能の関係を検討したものは少数ながら存在するが，その記述はその感動詞のみの検討にもとづく，いわば場当たり的なものであった。また，上昇や下降などと記述してあっても，それがアクセントとしての上昇や下降であるのか，あるいはイントネーションであるのかというような考察，すなわち日本語の韻律的特徴一般の中での位置づけを考慮しない論考がほとんどであった。こうした状況で感動詞音声の総合的研究としてまず求められたのは，多くの感動詞を広く見渡して記述の枠組みを構築すること，そしてそれを日本語の韻律的特徴の中でどう位置づけるかを検討することであった。

本論文では，高さの動きについてアクセントとして説明できる部分はアクセントととらえ，アクセントで説明できない部分だけをイントネーションととらえるという枠組みで記述を試みてい

る。これは感動詞をひとまず「語」としてとらえるという本論文の基本的立場と軌を一にするものである。なぜなら，語であるならばアクセント（語毎に辞書レベルで定まった高さの動き）を持つのが日本語の特徴だからである。本論文は上記の枠組みを用いることで，取り上げた感動詞すべての音調をアクセントと文末イントネーションの組み合わせによって適切に記述することに成功している。これにより，従来位置づけが不明であった日本語感動詞の音声的性格がはじめて明らかになったと言える。

この検討の結果にもとづいて，感動詞の音声的特徴の４類型への分類が提案されている（第３章）。この分類法の独創性とあわせて評価されるべきは，微妙な音声的特徴の記述にあたって，聴覚的な判断だけでなく音響分析を援用している点であり（３，４，５章），このことにより記述の信頼性が従来よりはるかに高くなっている。

意味・機能の記述について

本論文の最大の特色は，上記のような記述の枠組みを用いて分類された感動詞の音声的類型が，意味・機能の違いに対応していることを示した点である。ここでは感動詞の意味・機能は，その感動詞の発話者が受け取った情報を自分の心内で処理する過程を表示すること（処理をこれから開始すること，開始したこと，処理しないこと等），そうした処理の結果を表示すること，そして，肯定的な結果表示における受け入れの度合という３つの要素を主に用いたモデルで説明されている。心的処理という考え方自体は従来からの研究の路線上にあるものだが，音声的特徴との対応関係が明らかになったことにより，モデルとしていっそう高い説得力を持つに至ったと言える。

論文では第３章で音声的特徴と意味･機能の対応関係が著者の内省に基づいて検討されている。第４章では，音声的特徴の点でも意味・機能の点でもさまざまな広がりをもつ「うん」系の感動詞について，複数の状況を設定して実施したシミュレーション法により発話データを得，その音響分析が行われている。そのことで内省の確認がなされており，内省結果を実証的に裏付ける研究になっている。

感動詞にはこうした心的情報処理モデルで扱える言語的な意味・機能のほかに，話者間の社会的な関係にかかわるパラ言語的な意味・機能がある。どのような社会的関係を表すかはやはり音声的特徴次第である。論文第５章では感動詞「あ」をとりあげて，その音声的特徴と社会的関係の対応を発話調査と聴取実験を通じて検討している。そして，その対応が生理的現象としての緊張と，相手のフェイスに対する配慮というふたつの要因で説明できることを論じている。こうした社会的関係から見た感動詞の研究もまた従来なかった新鮮なものであり，そこでの研究手法の厳密性も高く，考察も緻密である。

第６章では，前章までの検討で抽出した感動詞の音声特徴規定要因を整理し，その相互作用について論じている。たとえば平板音調の「あ」は言語的な意味としては話し手に認識の変化が生じたこと自体を示す「入力情報の処理開始表示」であるにもかかわらず，社会的関係としては「相手が上」の場合に使われるというように，言語面とパラ言語面で競合する意味・機能を表す場合があることを明らかにしている。著者はこれを，情報処理過程の表示機能を相手に対する配慮として意図的に利用したものと解釈している。

総合的評価

本論文は日本語の感動詞研究としても音声研究としても重要な問題を論じたものであり，先行研究を十分に消化し，明確な問題設定をした上で行われた独創性の高い研究である。内容的には内省による仮説提示とその実証的裏づけが中心的な部分を占めているが，その手法自体も適切であり，またデータの収集方法と分析方法も概ね妥当である。議論の展開も論理的に行われており，十分な説得力がある明確な結論が示されている。以上より，本論文は日本語感動詞および日本語音声の研究に対して重要な新知見を提供することに成功した完成度の高い研究であると評価できる。

審査の過程において指摘された問題点として，各章に実際には有機的な関連があるにもかかわらず，そのことを明示的に示す書き方になっていない点があげられる。このほか，本論文では感動詞の機能が心的情報処理と社会性の点から検討されているが，他のとらえ方もありうること，また感動詞の表出には表情等の非言語要素も共起するが，そうした非言語の役割も小さくないと思われること，扱われていない感動詞もあること，話者間の社会的関係との対応が検討されたのが「あ」だけにとどまっていること，社会性の表示は終助詞等でも可能なこと，音韻論的な観点を取り入れることで音声的特徴がよりよく整理できる可能性があること，そして，内省をさらに厳密に裏づけるにはシミュレーション法ではなく自発音声の利用が必要であることも指摘された。ただし，これらの指摘は本論文の完結性を認めた上で，将来的な研究方向の示唆という形で行われたものであり，本論文の内容自体の評価を下げるものではない。

５名の審査委員は本論文を慎重に審査した結果，上記の理由により本学において博士（言語文化学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと全員一致で判断した。